

基礎問題プロジェクト第8回研究会 「格差を是正する全校型支援の実際」

日時 2011年7月30日(土)

第1部 講演 13:30～15:30(茗溪会館)

第2部 ワークショップ 16:00～18:00(お茶の水女子大学本館125教室)

講演

キャロル・ダヒヤ(ニューヨーク工科大学准教授)

通訳

熊谷 珠美(首都大学東京非常勤講師)

司会

伊藤 亜矢子(お茶の水女子大学准教授)

基礎問題プロジェクト第8回研究会は、ニューヨーク工科大学准教授のキャロル・ダヒヤ博士を講師として招き、「格差防止に寄与する全校型支援の実際」というテーマのもとで開催した。この研究会は、伊藤亜矢子准教授(臨床心理学)が中心になって企画し、当初、本年3月に開催を予定していたが、震災の影響で延期となり、今回、開催に至ったものである。

近年、日本では、学校が、生徒の低学力、不登校、高校中退等による格差拡大を防止する機能をどのように果たすことができるのか、またその際に、スクールカウンセラーがどのような役割を果たすことが求められているのかという点に関心が向けられるようになってきている。米国では、2000年前後から、格差拡大の防止に寄与する学校の機能が注目されるようになり、スクールカウンセラーの役割や養成のあり方を刷新する Transformed School Counselor Initiative の動きのなかで、スクールカウンセラーも、児童生徒個人への対応ばかりでなく、学校全体へのかかわりを通して、よりよい教育環境の形成に寄与することを新しい役割とするという考え方がとられるようになってきている。

ダヒヤ博士は、アメリカ・スクールカウンセラー協会(ASCA)による全米スクールカウンセリング・スタンダード(C. キャンベル&C. ダヒヤ著、中野良顯訳『スクールカウンセリングスタンダード:アメリカのスクールカウンセリングプログラム国家基準』図書文化社)の著者の一人

であり、包括的なスクールカウンセリングプログラムの開発、実施と評価に取り組み、Transformed School Counselor のテキストなども執筆されている。

伊藤准教授がコーディネーターを務めた今回の研究会では、そのような米国の動きやスクールカウンセラーの新しい役割を踏まえて、ダヒヤ博士に、全校型支援の実際についてレクチャーしていただくとともに、ダヒヤ博士の指導のもとで、全校型支援の方略を考えるグループワークを行った。

第1部では、ダヒヤ博士によって、問題を抱えた児童生徒を支える際に、スクールカウンセラーが校長、教員等と協力し、共通のビジョンとゴールをもってチームとして取り組んで動くことの必要性等を中心に、「全校型支援の実際」についての基本的な考え方が説明された後、参加者が関係する学校種別(小・中・高)に分かれての討論と、その内容を踏まえた上での全体討論が行われた。

第2部では、ダヒヤ博士の指導のもとで、同様のグループ分けによって、「いじめ問題への対処」と「生徒のストレスを減らし進学率を向上させる」という課題について、他の教職員と協働しながら解決する方策を検討するグループワークが行われた。

この研究会には、研究者・大学院生に加えて、多くのスクールカウンセラー、教員が参加し、日本の教育現場の課題に即した活発な意見交換が行われた。(平岡 公一)

第1部 講演

(司会)

皆さま、本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。本日は、ニューヨーク工科大学准教授のキャロル・ダヒヤ先生をお迎えして、「格差防止に寄与する全校型支援の実際」というテーマで講演していただきます。その前に、まず今回の主催者であるグローバルCOEの平岡公一先生をご紹介します。

(平岡)

お茶の水女子大学の平岡でございます。お茶の水女子大学では、「格差センシティブな人間発達科学の創成」というグローバルCOEプログラムを実施しております。日本の社会、日本の学校でもいろいろな格差というのが課題となっております。今日は、そのプログラムの一環としてこの講演会を企画させていただきました。私は本日、グローバルCOE側の担当者として参加させていただいております。どうぞよろしくお願いたします。

(司会)

ありがとうございました。講演タイトルに「格差」という言葉が入っていますが、何人かの方から、「格差、ギャップというのは何の格差、何のギャップですか」と聞かれました。日本で格差社会、学力格差などと言われているように、アメリカでも、子どもたちの学力の格差を縮めていかなければいけないとか、全ての子どもたちが高校を卒業してきちんと高等教育にアクセスできるようにすべきだというようなことで、政策的な取り組みが行われています。アメリカのスクールカウンセラーは1997年ごろから役割を変えてきており、それは「Transformed School Counselor」というものなのですが、学力も含めて学校の中での成功、あるいは社会生活を送るに当たっての子どもたちの成功を包括的に支援する人としてのスクールカウンセラーというふうには、スクールカウンセラーの役割が革新されてきています。

今回はそういう意味で、スクールカウンセラーが学校の中で多様な側面において全校型のアプローチをするときにどういうことが必要か、どのように協働をしていくのか、アメリカのスクールカウンセラーがどのように学校の人たちと一緒に働いていくのかということをお話いただく予定です。

それでは、これから前半のレクチャーをお願いします。通訳は首都大学東京の非常勤講師でいらっしゃる熊谷珠美先生をお願いいたしました。よろしくお願いたします。

(ダヒヤ)

皆さん、ようこそお越しくださいました。ありがとうございます。今日の講義を始める前に、まずアメリカでのスクールカウンセラーが15年前はどんなものだったのか、また、15年たった今はどういう状況なのか、そしてこれからどういう方向にアプローチが進んでいこうとしているのかについて、お話をさせてください。

1995年のアメリカでは、おそらく今の日本のスクールカウンセラーの状態と非常に似た状況にありました。1997年に、スクールカウンセリングに関する大きな変革が始まります。その大きな変革をアメリカで実施することになった理由は、たぶん今日ここに皆さんがいらしてくださっている理由と同じなのですが、スクールカウンセラーによる全ての生徒たち、児童たちの支援をもっと有効なものにするために始まったわけです。アメリカも日本と同じように非常に多種多様な背景の種類の子もたちがあり、全ての子どもたちが学校でうまくやっているわけではなかったのです。

そしてわたしたちが何年もかけて分かってきたことですが、たったひとりの人ががんばったからといってひとりの生徒の悩み、問題というのを解決することはできない。スクールカウンセラーも同様です。ですから、今日の講義ではぜひ、そのチーム作り、連携、そしてスクールカウンセラーがほかの教員の方々、校長たちと協力をしていくということがどれだけ大事なのか、そういうことをお話ししたいと思います。



1997年に、アメリカのスクールカウンセラーの全国協会で、全国的な基準を標準化する作業が行われました。そのナショナルスタンダードというのは、全ての生徒がどういった知識や態度を持ち、そしてどういったスキルを獲得することが必要なのかということについての、共通した基準になったわけです。この基準を持つことによって、ニューヨークからカリフォルニアに至る全ての地域で、全てのスクー

ルカウンセラーが生徒たち、子どもたちのために同じ目的を持って活動をすることが可能になりました。そして、全ての学校にスクールカウンセラーがいることによって、いわゆる問題を抱えている生徒だけではなく、全ての生徒がスクールカウンセラーの恩恵を受けることができるようになっていきました。

2003年に、同じアメリカのスクールカウンセラー協会が、スクールカウンセリングのモデルを作りました。今日このモデルを皆さんにお配りしましたが、これは「これをぜひやってください、日本でもやれますよ」と言うためではなく、このモデルがより多くの生徒にサービスを届けられるようにするために、どのようにわたしたちの働きを組織していけばいいかということを考えていく上で役立つと思うので、そのご紹介にと思ってお渡ししてあります。

このモデルがわたしたちアメリカのスクールカウンセラーにとって役立つのは、まずアメリカでのスクールカウンセラーが常勤でほぼ毎日学校に来ているからです。毎日学校にいられるという意味で、わたしたちは皆さんよりも多くの時間を持っているので、すべての子どもたちそれぞれに対応していけるという利点があると思います。

日本でも、伊藤先生やこの中にいらっしゃる皆さんに、将来的に全国的な標準やモデルというのを作っていただき、日本のスクールカウンセリングの状況をより向上させていただければと願っています。この ASCA モデルが日本語に訳されたとしても、必ずしも日本の皆さんのニーズ、現状に合ったものではないと思います。だからぜひ、日本の皆さんが、自分たちの手でモデルを作っていただきたいと思っています。

2003年にこの ASCA モデルが開発されて出てから分かったことのひとつは、カウンセラーが教師、校長といった方々と協働していくということが非常に大事だということです。生徒たちは本当にたくさんのニーズがあります。でもそれを支援する専門家の数が足りないわけです。だから先生方と手を組んで、手を取り合っていくということが非常に大事です。

ここにいる教員、そしてカウンセラー、そして学生の皆さんと一緒に考えていきたいのは、学校の目標に対して一緒に取り組んでいくということがどれだけ大事なのかということです。校長が学校で掲げる目標は、生徒にとっての最善を目指したものです。今日は、お互いから刺激を受けて、新しいアプローチの仕方というのを学んでいただければと思います。

私が働いているニューヨーク工科大学は、名前こそ工科となっていますが、教育学の部門もあり、そこでわたしたちは学校のリーダー、スクールカウンセラー、教師、校長、そういった方々のトレーニングを行っています。スクール

カウンセラーや教師、校長というのは、これまで一緒に学びあう時間が十分ありませんでした。今日は、そのことについてわたしがこうすればいいのではないかと思う考えをいくつかご紹介しますので、皆さんもお持ちのアイデアをぜひわたしに教えていただければと思います。

ではさっそく、全校型のアプローチについてお話ししたいと思います。なぜわたしたちが学校にカウンセリングのプログラムを持つのか、その重要性についてまず考える必要があると思います。

日本もそうだと思いますが、アメリカでも保護者は子どもを学校にカウンセリングを受けさせるために行かせるわけではありません。教育を受けさせるために送っているわけです。でも実際カウンセラーの仕事というのは非常に学校の中で重要なものであります。その理由というのはたくさんあるのですが、いくつかは今ここに挙げてあります。

皆さんお手元に資料があると思いますので全部は言いませんが、何よりも大事なものは、とにかく全ての生徒、その子どもがたとえば貧乏だろうが、裕福であろうが、すごく優秀な子であろうが、障害があろうが、全ての子どもたちが最大限力を発揮できるように支援をするということがあります。そして、そういった全ての生徒が質のよい教育の重要性というのを理解し、他者とよりうまくかかわっていけるように支援をするというのが非常に重要な目的になります。

ではなぜスクールカウンセラーが協働する必要があるのでしょうか。スクールカウンセラーひとりだけでは、全ての問題を解決することができないからです。またスクールカウンセラーの役割として大事なものは、子どもたちがなぜ学校が必要かを理解するために、全ての教師そして校長、また家族の方々にとって、どうすることが必要かを考えていくことです。そしてカウンセラーがひとりで解決しようと取り組むよりも、教員や家族の方たちと一緒に取り組むことで、問題はより解決しやすくなります。

きっとすべての皆さんが何らかの形でチームという活動をされたことがあると思いますが、わたしたちは、学校全体がひとつのチームだというビジョンを持っています。チームというのは共通の共有した目的、ゴールがあるということが大事なのです。人々がそれぞれ一緒にやりたいとって集まるだけではだめで、同じ共通の目的を持って一緒に取り組むというゴール、ビジョンがあることがチームをつくるということです。ゴールを持つことが大事だという定義をぜひ皆さんの心に留めていただいて、ご自分の学校に帰った際に同僚やほかの教師とチームを作るときに、使っていただければと思います。

協働というのは、チーム作りと少し違います。協働というのはチーム作りと同じように、共通のゴールを持つとい

う点は一緒です。しかし協働という場合には、責任をお互いにわかち合うということも出てきます。わたしの強みをあなたの強みで補う、またわたしの弱いところをあなたの弱いところで補うという、補完しあう相互的な協力というの出てきます。そして協働というのは、お互いを尊重しあいあうという中で一番力を発揮できるのです。教師がスクールカウンセラーに敬意を払う、スクールカウンセラーも教師に敬意を払う、そしてすべての人が校長に敬意を払う、そういった中でよい協働というのが可能になるわけです。

この今日の講義で、「協働」という言葉と「チーム」という言葉は両方大事なもののなので、それについてお話したいと思います。この2つが子どものために働くということが一番大事なポイントになってくると思っています。

スクールカウンセラーは、協働の中で、ほんの少しだけアドバンテージを持っています。スクールカウンセラーはグループで仕事をするに関してトレーニングを受けていますので、知識があります。たとえばグループの中で葛藤が起こったりということがありますので、そういったときに仲介する役割としての力を発揮できます。

先生方も大きなグループでいかに働くかということについて、長けていらっしゃると思います。教師は、見てとれる子どもたちの行動に関して取り組むことができますし、スクールカウンセラーは、なぜその子どもはそういう行動をするのかというダイナミズムに取り組んでいくことができます。だからこの教師が持っている強み、そしてスクールカウンセラーが持っている強みを合わせれば、どういった問題でも解決できるぐらい強力なものになると思います。



人々は、協働しあうことに対して抵抗を示したりするのでしょうか。ほかの人と一緒にやるというのは、実はとても大変なときというのがありますね。でもどんなに協働するのが大変だとしても、やはり多くの人と一緒に取り組むことによって達成できるものはより大きくなると思いま

す。「ああ、この人はもしかしたら一緒にやっていきたいと思っていないかもしれないな」というのはどのようにして分かりますか。やはり意見が合わない、それには賛同できないというふうになっているときには、「一緒にやりたいたいと思っていないな」と顔で分かりますね。また、態度や姿勢で示してくる場合もありますね。

なぜ一緒にやりたくないのか、理由についても考える必要があります。仕事が増えるというのはいやだと思えますよね。または自分だけが正しいことを知っている、分かっているというふうに思っている人もいますね。だからちょっと時間を取って、どうして人々が協働したくないと思うのか、そしてそういう人たちにいかに協働してもらうように促していけるか、そのことについて少し考えていきたいと思っています。

今、学校の中で直面している課題を何かひとつ考えていただけますか。

[フロアから、出席・生徒の態度・中退・いじめ・不登校などの問題が挙がる。]

では次に、カウンセラーがどんなふうに関与してこの問題に取り組むことができるかについて考えてください。ひとりできることはなんでしょうか。カウンセラーは、ひとりで中退問題を解決できると思いますか。もしその方向を思いつくことができたなら、皆さん大金持ちになれると思います。もし学校の教師がそういう解決方法を考え出せるとしたら、それこそ億万長者になれると思います。でも、教師とスクールカウンセラーが共に手を取り合って問題を解決しようとしたらその力は本当に2倍にも3倍にもなりうると思います。

いじめについてちょっと考えたいと思います。実際、小学校でも中学校でも高校でも、いじめの問題というのは起こっています。学校の中でいじめを解決しようと取り組んできたなかで、皆さんにはどんなやり方があったでしょうか。

ちょっと時間を取って、教師というのはいじめを解決するためにどんなことができるか、スクールカウンセラーがどんなことができるか、というのを紙に書き出していただけますか。アメリカでも高校生に非常にいじめも多く発生していて、いじめが原因で学校を退学せざるをえないということが起こっています。あなたひとりでする解決策というのも書いていただきながら、ほかの人たちと一緒に組んでやれる解決策というのも、あわせて書き出してください。

[この後、参加者はそれぞれが関係する学校種別(小・中・高等学校)に分かれてディスカッションを行った。]

(ダヒヤ)

それでは皆さん、いろんなアイデアを出していただいたと思います。その中で、ひとりですることと、協働して一緒にできることを考えていただいたと思いますが、さっそく少し紹介していただこうと思います。まず小学校のチームの中で紹介していただける方、お願いします。

**(フロア)**

ひとりでする場合は、1対1でいじめられた子どもやいじめた子どもに話を聞く、可能な限りで原因を調べるなど。同僚と一緒にやる場合は、子どもについての情報交換、教師との役割分担など。最終的には、連携しないと何もできないのではないかと話になりました。

(ダヒヤ)

教師、カウンセラー、管理職に加え、保護者の方や地域の方たちも巻き込んで話をしていくと、より問題の背景、どうしてそういうことが起きているのかということが分かってきます。多くの人にかかわってもらえばもらうほど、より強力な計画というのが生み出せるようになります。協働しあうチームの中に、子ども自身の声も入れてあげることが非常に大事なことがあります。

ほかの小学校のグループの方、いかがですか。

(フロア)

ひとりでがんばるという場合は、まずいじめられた子の100%味方になること、学級の観察や当事者たちの様子を見て、解決に結びつくアドバイスができたらいと思います。同僚と一緒にやる場合は、担任、養護教諭、学年主任と一緒にできたらいいということが出ました。

(ダヒヤ)

養護教諭と担任の教師というのは問題の解決に非常に大きな役割を果たしてくれますね。担任の教師はある側面か

ら物事を見ますし、またスクールカウンセラーもスクールカウンセラーの立場から見る視点というのがあります。そしてそのほかの人たちからもいろんな視点から見えるものというのがありますので、それが大事ですね。

今日はいじめに関してのワークショップではないんですけれども、いじめに関して考えるときに、被害を受ける子どもがまずいます。そしていじめる子というのがあります。そしてもうひとつ傍観者の子どもたち、何も見ないけれども見ている子たちというのがあります。この傍観者にも、一緒に行動してもらうことができるかもしれません。

中学校のグループはいかがでしょう。

(フロア)

まず、子どもそして先生方からの聞き取りで、起こっていることの構造を理解すること。また、教室で観察したり、職員室に向向って行って、担任だけではなく教科の先生すべてから情報を集めるということが大事だと思います。

(ダヒヤ)

アメリカでも中学校は日本と似たような仕組みになっていて、たくさんの教師がクラスの子どもにかかわるような形になりますので、ときにはスクールカウンセラーが7～8人の教師と一緒に協力して協働しなければいけなかったり、7～8人の教師がスクールカウンセラーと協働する必要があったりします。

また、関係している人たちも、より一緒にかかわってもらうように促すことも大事だと思います。担任の教師もそうですが、ほかには管理職や学校の職員、職員というのは授業を持っていなくてもいろいろな形で生徒たちを見ているので、ぜひ一緒に協力していただけるといいと思います。

(フロア)

いじめられている生徒の話の聞けたとして、その生徒が教師などほかのひとには言わないでほしいという例があります。しかし、カウンセラーは勤務が週1回なので、教師にはさりげなく見守ってほしいと実際には伝えることがあります。協働は重要ですが、生徒がカウンセラーのところに行かない理由は、行ったら先生に筒抜けになるからだという話もあり、中学生は非常に敏感だということも肝に銘じる必要があります。

(ダヒヤ)

守秘義務について非常に大事な指摘です。やはり多くの場合、守秘義務のことで非常に難しくなることが多いと思いますが、協働するという点においていわゆるだれだれ

の名前をもらすとか、そういうことより、大きな問題に関していかに解決していくかという視点が必要だと思います。特にスクールカウンセラーがいないとき、教師がある程度情報を知っておくということが必要として出てくると思います。

守秘義務に関しては本当に非常に慎重に扱わなければならないですし、それがだれも傷つかないという状況である限りにおいて守るべきものであります。しかし、もしだれかが傷ついてしまうというような状況にある場合は、アメリカの倫理で考えると、必ずそのことを知る必要があるすべての人が必要なだけの情報を知っておくということがより大事になると思います。

いまのチームから学ぶべき大事なことは、やはりスクールカウンセラーは週に1日しかいないので、教師、職員そして管理職の方たちを巻き込んで協働するということが非常に大事なことだということです。

ほかに、高校生のグループではいかがですか。

(フロア)

ひとりで行う場合、まず問題を発見して同僚の教師、担任、上長につないでいくということが一番だと思います。男性教師と女子生徒とでは、ハラスメントなどでいろいろな問題があります。高校ではカウンセラーがいない場合も多く、私の学校では保健室登校を認めて、問題がある学生のためにネットワークを作っています。保護者との対応の問題などもあるので、学生が「言わないで」と保健の先生に言った場合、極力名前は伏せますが、情報は共有化するようにしています。

(ダヒヤ)

生徒が成功をおさめていくには、やはり保護者のかかわりというのは非常に重要です。それから、男性教師と女子生徒、女性教師や女性カウンセラーと男子生徒、そういった場合にも、やはりこの年代になると異性の教師に話づらいということがありますので、性別も含めてよりいろんな方々に一緒に協力してもらおうということが非常に大事だと思います。

今日は簡単なアクティビティでしたが、このことを皆さんの学校の中で何らかの形で生かしていただければと思います。どんな問題があっても、このような連携、会話をすることによって、問題を解決したり、解決の糸口を探っていくことができると思います。わたしにとってもひとりで行ったほうが容易いように思うこともありますが、それでもやはりもっといろんな人と協働することによって、もっとよりよい成果を出せると思います。

違う業種の人たちと一緒に働いていくときというのは、

教師も、カウンセラーも、校長、管理職もそうなのですが、時にはいらいらしてしまうこともあります。協働していくのは時間がかかるものではありません。それでも、それに時間を費やすことによって、よりポジティブな学校風土というのが生み出せると思っています。

スクールカウンセラーの方々は、週1回勤務というのが多いと思いますが、たとえそれだけのかかわりだったとしても協働するという事は非常に大事です。1週間に6時間しか学校で時間が取れない状況であれば、どこでほかの人たちと協働する時間を生み出せるのかと悩むこともあると思います。しかし、逆を考えるとたった1日しか学校にいないわけですから、協働するという事はほかの何よりも重要なことになるわけです。

わたしもスクールカウンセラーなのですが、保護者、教師、校長、そして担任の教師が子どもに与える影響力の大きさというものすごさを、身をもって知っています。それぞれの人たちが持っている影響力というもの、そしてもたらしてきているものに関してやはり敬意をひとつひとつに払っていくことが大事だと思っています。

学校にいる全ての生徒に成功してもらうためには、やはりわたしたちが協働する時間を必ず作っていかなければならないと思います。変化というのはわたしたちが作り出すものです。ほかの人が変えてくれるものではないので、この学校をよりよい場所に、すべての子どもたちがもっと力を発揮できるようにするには、わたしたち自身が変えていこうという会話を始めなければいけないわけです。だから、チームを作ったり協働していくということは非常に効力のあることです。

今日、皆さんにエクササイズをしていただきましたが、こうやって話し合う中で共通の目標というのが生まれてきましたね。どうやって解決していくかという共通の方向性についても、話し合いが進んでいました。他の人が自分よりよい考えを持っていると、つねに思うべきだということではありません。しかしやはり教育という場においては、みんなが同意するという事、そして一緒にやっていくということが非常に大事なことです。今日は、本当に活発な議論がなされていたと思います。やはり仕事というのは時には困難なことも多く、頭痛の種にもなります。でもこうして一緒に話し合うことによって、やっていけるという思いが生まれてくると思うのです。

協働するという形には2種類があります。ひとつは公式なもの、そしてもうひとつは非公式なものです。学校における問題解決は、時には公式なものである必要があります。今日のように、いじめなど特定の問題に対してチームで取り組むこともあります。それは、学校の問題を解決する公式なタイプのものかもしれません。カウンセリングの

ための学校委員会とか、特別支援教育のための学校委員会などです。

このような公式な協働も非常に重要なのですが、また別のかたちの協働もあります。ほかの先生方と、お昼を食べながら話したり、廊下で会ったときや、放課後に話をすることはありませんか。居酒屋で話すこともありますね。

このように、多くの協働の形があります。どんな形でもコミュニケーションがあればあるほど、よりよく問題を解決していけるということを覚えておいてください。アメリカでは「ノー・チャイルド・レフト・ビハインド」という、どんな子どもも置き去りにしないという意味の法律があります。わたしはむしろ、どんな教育者も置き去りにしない、と言いたいと思います。

連携というときに、もうひとつ考えたいのが地域にいる人々のことです。学校に通う子どもがいなくても、地域の人たちというのは学校に対して様々な形で支援をしてくれています。このスライドに挙げているような例もありますが、ご自分の地域のことを考えてみていただければ、もっと付け加えられると思います。

誰と？

- 管理者
- 教員
- 他の学校関係者
- 保護者と他の家族関係者
- 地域の機関
- 近隣の組織
- 大学など高等機関

あなたの学校と地域に照らして考えてみよう

C. Dahir, 7/30/2011



わたしはスクールカウンセラーとして、大学や高等教育機関と連携をすることを大事にしています。なぜなら、大学生というのは小学生、中学生、高校生にとって非常にいいロールモデルになるからです。東京にはたくさん大学があるので、ぜひ「手伝ってください」と電話してみてください。

わたしたちは誰と協働していくかを考えると同時に、どのように協力してもらうかということも考える必要があります。これはそれほど簡単なことではないからです。スクールカウンセラーの方は、修士課程で学んだグループワークについての知識やスキルをぜひ生かしてください。管理職は、スクールカウンセラーのうまく手助けする能力に期待してください。

また協働というのは、一夜にして生まれるものではありません。

粘り強さも忘れないでください。あなたが苦手な人について思い浮かべ、その苦手な人とどんなふうによく協働していけるか、考えてください。大人同士がうまく協働しあえるのであれば、学校というのはより幸せな場所になっていくはずですよ。両親は、子どもを育てるのは自分自身の責任だと考えているとしても、すべての家族がかかわっていくことが大切だと理解する必要があります。学校も、家族と同じように考えてみてください。すべての人が責任を分かち合っています。

もうひとつ大事な考え方としては、スクールカウンセラーと校長と一緒に計画を立てるということです。校長がカウンセラーの果たしている役割について十分に理解をし、そしてスクールカウンセラーも校長が果たしている重要な役割について理解していれば、ほかの教員との連携が、たとえスクールカウンセラーが毎日いなくても楽にやっつけられます。また、学校の教員と校長と一緒にやっていくということも、非常に大事だと付け加えたいと思います。

最後に、連携、協働におけるパートナーシップについてお話しします。わたしたちが共通のゴールを持っていれば、目的も同じです。たとえばいじめについてですが、わたしたちは地域全体の問題を解決するようなことはできませんが、学校をより安全でよりお互い敬意を払い合うような場所にすることができます。それは生徒たちだけではなく、わたしたち教員、大人にとってもです。わたしは、大人というのは子どもよりも賢く、より力があり、そして解決する能力もあると考えたいと思います。学校の問題をたったひとりの人が全部解決しようとするより、チームを作ったほうがよりパワフルです。

今日はこの場所に校長先生と副校長先生がいらっしゃいますが、きっと学校における問題のほとんどすべてのことをケアしなくてはならないという責任を感じていらっしゃるのではないかと思います。しかし、みんなが同じ目標を持って動かないと、それはたいへん難しいことです。

最初に、子どもたちの中に十分な支援を受けられていない、また十分に成功できていない子がいると話しました。わたしたちが学校内で協働することができれば、すべての子どもたちがわたしたちにとって可能性のある大事な子どもたちになります。言い換えれば、学校にいるわたしたちすべての大人がすべての子どもたちの幸せに対して責任を持っていると言えると思います。その子どもはあなたが担当している子どもではないかもしれませんが。しかしあなたのいる学校の生徒です。学校にいるすべての子どものために、協力してゴールを見据える必要があります。

スライドで示している「再構築のためには、まず始めに、私たちが子どもたちのために設定した目標と私たちが彼らに対して抱いている信念をじっくりと見極める必要があ

る」という言葉は、社会正義に関して活動している Asa Hillard III という人が書いたものです。やはり学校にいる子どもたちの中にはうまくできない、学校がもたらしてくれる利益を十分に活用できていない子どもたちがいます。それは家族が十分なケアをしていないために、力を発揮できていないのかもしれません。しかしカウンセラー、教師、校長と一緒に共に手を取り合うことによって、学校にいるすべての子どもが十分な良質な教育を受ける権利を保障しとあげるといえることができるようになります。

これから学校が始まると思いますが、今日この話から、新学期の新しい取り組み、アイデアというものを受け取っていただけたら幸いです。

第2部 ワークショップ

(ダヒヤ)

今日は、これからグループワークをやっていただきます。それによって、学校が再開したときにこうしたらいいというアイデアを持って帰っていただきたいと思っています。今日やっていただきたいのは、皆さんの目標と学校の目標を一致させるということです。このワークシートを見ていただけますか。

学校目標	活動	協働	Grade Level(s)	期待される効果
いじめを減らす				
中退者を減らす(卒業者を増やす)				
?				
?				
?				

C. Dahir, 7/30/2011 2

最初の列に、学校目標を2つほどすでに書き入れてあります。その下に空白の欄があるので、そこに皆さんの学校で必要だと思える目標を書いていただけますか。学校の教員として、スクールカウンセラーとして、校長として何が目標として大事だと思うか、書いてみてください。そして、考えたことをチームで話し合ってみていただけますか。きっと違う学校でも似たような目標が出てくるのではないかと思います。

[参加者はグループに分かれて、ワークシートに記入。]



(ダヒヤ)

いろいろ書いていただいた中から、ひとつ学校目標を選んでください。そして、たとえば教室、もしくはカンセリングルームでできることなど、その目標を達成するためにどんな活動ができるかというのをひとつ考えてください。そして次に、その活動をどんな人と一緒にやれるといいか考えてください。その活動が、どの学年の子どもたちに向けてやるものなのかということも考えてください。幼稚園児なのか、中学2年生か、高校生なのか。期待される効果という欄には、これによってどんなことが起こってほしいと思っているか、どういうことが起こると期待されるか、そういったことを書いてください。

たとえば学校の教師が授業や活動を計画するときに、その授業後になにが起こってほしいかというのを念頭に置いて考えています。同じように、スクールカウンセラーが活動を計画するとき、子どもたちにどんなことが起こってほしいと期待しているでしょうか。アメリカでは、これを「インテンショナル・カウンセリング」(意図を持ったカウンセリング)といいます。

きっとそれは先ほど話した「ノー・チャイルド・レフト・ビハインド」(NCLBの法律)の影響かもしれませんが、わたしたちは何かやる時にある目的を掲げてやっています。教師が、何を教えるか、なぜ教えるかということに目標をもっているように、スクールカウンセラーも目的をもち、なぜカウンセリングをするのかということを考えていく必要があります。計画をするときに、まず学校の年間を通した目標、どんな活動をしていくか、そしてだれと協働していくといいのかを考え、その中で子どもたちにどういったニーズがあるかということも理解しながら立てていってください。そしてこのような計画と連携によって、わたしたちは望んでいる結果を導き出すことができるはずですよ。

どんな学校の目標も、たったひとつの活動で達成できるわけではありません。たとえばその学校の生徒たちの読解力を向上させたいと思ったときに、たったひとつの活動で

それが達成できるでしょうか。それは学校の教師にとっても、カウンセラーにとっても同じです。たったひとつの活動で変化をおこすことは不可能です。奇跡を起こす方法を知っていれば別ですが。そこで、教師とスクールカウンセラーと一緒に計画を立て、計画が実際に実行されていくと、その結果というのはかなり力強いものになるわけです。

ではこれから2つのアクティビティを皆さんにやっていただきます。それぞれのチームによってどちらのアクティビティがいいかというのは違うと思いますので、選んでください。最初のアクティビティは、いじめについてのアクティビティです。いじめというのはやはり日本でも大きな問題になっていると思いますが、それはどこの国でも一緒です。

Activity

課題: いじめの行動を減少させる目的で、あなたの学校が直面している重大な問題を同定するように一緒に考えてみましょう

- あなたのデータからいえることは何ですか？
- 積極的な学校風土や文化を創るために、ただちに来週あなたが使える戦略は何ですか？
- 教員と職員を引き込む(巻き込む)ために、ブレインストーミングを行おう
- 次に何をするかを決めよう

C. Dahir, 7/30/2011

3

2つ目のアクティビティはストレス、高校を卒業すること、または卒業後の進路についてのことです。

(司会)

学校ストレスというのは、いじめに遭ったり、友だちとうまくいかないなど、学業だけではなくて、様々なストレスという意味です。

Activity

課題: 学校生活上のストレスを減らし、大学合格を増加させようとした時に、あなたの学校が直面している重大な問題を同定するために一緒に考えましょう

- あなたのデータからいえることは何ですか。
- より多くの学生がストレスを減らし志望校に合格するために、来週ただちにあなたは、どんな戦略を用いますか。
- 教職員など引き込む(巻き込む)ために、ブレインストーミングを行おう
- 次に何をするかを決めよう

C. Dahir, 7/30/2011

4

(ダヒヤ)

これは、高校生のチームに役立つアクティビティかもしれませんが。また中学生のチームでやっていただくのもいいかもしれません。学校を卒業した後のことについて考え始める時期でもありますので。これからやっていただくアクティビティは、これはご自分の学校で、現場に戻られてやっていただいてもいいものだと思います。

注目していただきたいのは、結果もそうなのですが、それ以上にどんなふうにならざるを得ないかを一緒にやっていったかというプロセスです。どちらのアクティビティもグループワークになりますので一緒に取り組んでいってください。

これからこの2つのアクティビティについてももう少し説明をしていきますので、それを聞いて各チームでどちらをやるか決めてください。アクティビティでまず行うのは、データ(情報)から何が分かるかを考えることです。そのデータはあなたにとってどんな意味があり、何を教えてくれるのでしょうか。まず、どのデータを見たらよいでしょうか。

たとえばひとつ目のアクティビティであれば、いじめが学校で問題となっていた場合に、どのようにいじめが起こっているというのが分かるのでしょうか。どこの情報からそれが分かるかということをもまず考えてください。観察から得られる情報というのがありますね。時には、あなたに直接子どもが話をしてくれるかもしれません。けんかや生活指導に関して、校長が記録をつけているかもしれません。たとえば校長が、このけんかはいじめの結果起こっているかどうかの情報を持っているかもしれません。そのように学校の中に散らばっている情報を通して、わたしたちはどれぐらいの生徒が今困った問題を抱えているかを知ることができるわけです。

小学校ではたとえば休み時間というのがあると思います。その時間に、結構多くの子どもがいろんなトラブルを起こしてしまうわけです。校長というのはその情報を把握しています。校長や子どもたちと直接わたしたちが話さない限り、何がどうしてそのことが起こったのかというのは知りようがないわけです。子どもがあなたに、「実はこういうことが起こったのはからかわれたからなんだ」とか「いじめがあったからなんだ」というふうに教えてくれたら、その時点で「あ、ここでいじめの問題が起こっている」ということが理解できる、その情報が得られているわけです。

たとえば、ある子どもが毎日出席していたのにある日を境に毎日来なくなってしまった場合、出席という情報から何が起こっているということをわたしたちは推測できるわけです。だからこういった出席のようなデータもいい情報ですし、または観察から得られる情報もありますし、子どもたちが直接わたしたちに打ち明けてくれる話の内容に

もたくさんの情報が含まれているということです。

データというふうにわたしが言ったときには、まず得られる情報のことだと考えていただいて、そのあとにアセスメント、査定というのがきます。このように情報を集めるというのは、いわゆる探偵になるような気持ちでやっていただければと思います。テレビの科学捜査ドラマCSIシリーズは日本でもやっていますね。ご存知ですか。まずは調査をして情報を集め、情報を吟味し、そこから理解をしていく、そういった探偵、調査官がやるような作業をしていきます。

中学生チームや高校生チーム向けかもしれませんが、どんなふうにして生徒たちがストレスをかかえているなどわたしたちが知ることができるのでしょうか。ストレスの結果として、どのような行動をわたしたちは見て取れるでしょうか。出席に関して影響が出たり、あるいは教師に怒鳴ったり、ひとりであったり、たくさんの形で子どもはストレスを受けていることを示してくれます。眠れないといったことも出てくると思います。そのように、学校の中で情報収集できるデータからいろいろなことを見ていきます。どの子が学校に来なくなったとか、どの子がトラブルに巻き込まれるようになったかとか、出席がよかった子だったのに急に出席率が落ちただとか、そういうデータを見ていきます。

学校生活上のストレスというのは、学校の風土に非常に関係があります。生徒がどのような理由であれ、学校にいて安心できるというふうには感じられない場合、卒業率というのは非常に下っていきます。卒業率が下るということは、生徒たちは入学試験を受けないということも意味しますので、大学進学率も同様に下っていきます。

学校で得られる情報をわたしたちが収集して把握していくことによって、何の問題が起こっているのか、そしてそれが問題を抱えているのかということをもより理解することができるわけです。

ではこれから、これら2種類のアクティビティについて見ていただいて、どれを皆さんやりたいかというのを考えていただきます。まずどんなデータが有用かを考えてください。その情報を使ってどういった計画を立てられるかということを考え、そしてそのあとにどんな戦略がその状況を変化させることができるかについて考え、それをするためにはだれと協力をする必要があるのかということを考え、そして、次にどんなステップを取るのがいいのか考えてください。

[このあと参加者はグループに分かれてアクティビティを行い、その中からいくつかの結果発表が行われた。]



(ダヒヤ)

最後に二つだけお話しします。問題解決を学校で協働してやっていく際に、校長がこれをやる意義をきちんと理解しているかというのがとても大事になってきます。今、皆さんのお手元に下書きのサンプルがあるのですが、スクールカウンセラー、教員、そして校長がどんなふうにも協働していけるかというのを書き出すものです。

なぜこれが重要かという、もし校長がカウンセラーや教員がやろうとしている目的というのをきちんと理解していなければ、問題解決に到底達しないからです。教員もカウンセラーも、そして校長も同じ目的というのを共有する必要があります。今、お手元にある下書きのサンプルというのは、きちんとした公式のフォーマットになっています。ただほとんどのカウンセラーや教員、校長にとって、サインまでするようなフォーマルな形式は必要ないと思います。これをお渡ししたのは、校長と来年度の学校の目的に関して話をするとき、どんなふうにも話せばいいかというガイドラインになると思ったからです。

この真ん中の表がありますが、これは先ほどお話したASCAのモデルからきています。ただしこれはアメリカのモデルです。アメリカでは同じ学校に毎日カウンセラーがいますので、皆さんとはだいぶ異なってくると思います。ここに、カウンセラーがそれぞれの項目に関してどのように時間を分配する必要があるかということが書いてあるのですが、アメリカではこんなふうにもしているんだと参考程度に思ってください。

そして次のページは、今日皆さんにやっていただいたアクティビティと非常に似たものです。まず学校目標です。たとえば最後のグループは学業キャリアのこと、卒業のことなどを学校目標として考えていました。そして計画を立てるのに役立つ情報を見ていくと、どのような結果がほしいのかというのが見えてくるはずですよ。

来年度の学校の仕事に関して、今日の午後やった中から3つほど皆さんに持って帰っていただきたいものがありま

下書きサンプル

スクールカウンセラーと校長協働計画書
SCHOOL COUNSELOR AND PRINCIPAL COLLABORATION PLAN

共に計画をたてることによって、連携を育み、学校目標を達成できるようにすることを目指しています。
注意：この計画書は、スクールカウンセラー考えたアイデアが書かれている下書きです。この計画書は評価用のツールではありません。

校長の名前: _____
カウンセラーの名前: _____

1. 役割
ASCA 全国モデルによれば、スクールカウンセリングのプログラムを確実に展開するために、スクールカウンセラーは以下に示している（おおよその）時間をそれぞれの項目に費やすべきということです。

項目	項目の概要	推奨時間		
心理教育の授業	総合的で発達的な生徒育成のカリキュラムを、体系だった方法で小学生から高校生までの全ての生徒に提供する	小学校 35% - 45%	中学校 25% - 35%	高校 15% - 25%
進路指導	生徒や保護者が進学やキャリア計画をたてるのを援助する	小学校 5% - 10%	中学校 15% - 25%	高校 25% - 35%
個人/グループカウンセリング	全ての生徒の差し迫った心配事に対処する	小学校 30% - 40%	中学校 30% - 40%	高校 25% - 35%
学校支援	プログラム、職員、学校支援活動やサービスが含まれる	小学校 10% - 15%	中学校 10% - 15%	高校 15% - 20%

©C.Dahir, 2009

学校目標と一致させる

学校目標	学力向上	キャリア開発	社会性向上	測定出来る結果

2. 専門家の協働
スクールカウンセラーは定期的に、また必要が生じたときにも、次の人たちと会います。

学校職員 School staff/faculty _____ 校長/管理職 Principal/administration _____
教員 Teachers _____ 教科別部門 Subject area departments _____
教育委員会 School Committees _____ その他 Other: _____

コメント

カウンセラーの署名: _____

校長の署名: _____

©C.Dahir, 2009

す。ひとつは皆さんが自分自身で目標をどういうふうに立てるかということ。そしてもうひとつは、その目標に対してどんなふうに協働しながら解決していけるかと考えていくこと。そして三つめは計画の必要性、その計画というのがどんなふうにカウンセラー、教員、そして校長に役立つものなのか、ということです。もしそれが可能なら、ぜひ仕事において、新しい仕事のやり方、試みを考えていただければと思います。

皆さんは元旦に今年はこうしようというような方向を立ててと思いますが、新しい戦略をそのようなものだと思うてください。目標を立てて、そしてだれとパートナーを組むかというのを考え、そして何よりも大事なのは、生徒がそれぞれ支えあうということを引き出すことです。生徒同士が支えあうという環境があれば、いじめというのは減りますし、より尊敬し合えるそういう土壤が生まれます。そして、生徒自身もキャリアの目標を持つということが必要です。そうすることによって学校にいる理由が自分たちも分かるようになります。そして同僚のやる気を引き出すようなかわりというのでもいいと思います。教師や、カウンセラーの人は時にバーンアウトしてしまうことがあります。

そして生徒に一番分かってもらいたいの、高校を卒業

したあとにいろんな選択肢があるのだということです。それは専門学校や大学かもしれないし、もしくは職業訓練校だったりするかもしれませんが、とにかくいろんな形があり、道があり、そのどれひとつも、どれか劣っているのではなく、それぞれがとても大事な選択肢なのだということを生徒に知ってもらおうということが大事だと思います。

日本ではスクールカウンセラーという職業というのはまだまだ新しいものかもしれません。でも今、スライドで示しているように皆さんの学校の校長が「私たちはスクールカウンセラーなしで一体何ができるのか？」と思っているといいなと思います。スクールカウンセラーが教員や校長、そして職員の人たちと手を取りあっていくと、学校にとってスクールカウンセラーというのが欠かせない存在になっていくわけです。

締めくくりの言葉として、いつか日本でもスクールカウンセラーがすべての学校に毎日いるということが実現することを願っています。今日は時間が長くなってしまいました。皆さんの熱心なとりくみに心から感謝します。ありがとうございました。

(司会)

皆さん、本当にありがとうございました。先ほどの皆さん

PROCEEDINGS 19

February 2012

んのワークもわたし自身もとても勉強になりましたし、本日は皆さんのおかげでとても充実した時間が持てたと思っています。改めてキャロルさん、通訳の熊谷さん、それ

から事務局の方々に拍手をしていただいて終わりにしたいと思います。